

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

COVID-19 拡大による介護実習中止に伴う学内振替学修に関する報告 -ICTを活用した学修プログラムの成果と課題-

著者	古川 和稔
著者別名	Furukawa Kazutoshi
雑誌名	福祉社会開発研究
巻	13
ページ	53-63
発行年	2021-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012285/

COVID-19 拡大による介護実習中止に伴う学内振替学修に関する報告 — ICT を活用した学修プログラムの成果と課題 —

SW高齢ユニット研究員
東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 教授
古川 和稔

キーワード：COVID-19、介護実習、学内振替学修、介護福祉士養成校、

I. 研究背景と研究目的

2020年は新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）拡大の影響を受けて、社会全体が未曾有の混乱の渦中にある。介護福祉士養成教育も例外ではなく、通常の対面授業が困難な状況下の介護福祉士養成校（以下、養成校）においては、授業内容の変更を余儀なくされている。特に学外で行う介護実習に関しては深刻な問題を抱えている。文部科学省および厚生労働省は2020年2月28日と2020年6月1日に「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」という事務連絡¹⁾を出し、「学外での実習が困難な場合には、学内での演習等で必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」と通知した。筆者の知る限りでは、当初は実習時期の変更を検討していた養成校が多かったが、一向に収束の気配がないCOVID-19の状況を鑑みて、学内で行う演習等（以下、振替学修）を検討し始める養成校が増えてきた。そのような中、日本ソーシャルワーク教育学校連盟は2020年5月26日付の通知³⁾にて、社会福祉士及び精神保健福祉士の実習教育に関する考え方を示した。しかし、介護福祉士養成教育に関してはこのような文書は存在せず、振替学修の内容は各養成

校の判断に委ねられている。

筆者が関わるA大学では、2020年5月から6月にかけて予定していた介護実習Ⅲ（障害者支援施設における介護過程の展開を含めた135時間の実習）を、ICTを活用した学内における振替学修に切り替えた。今後も学外での介護実習が困難な状況が続く可能性もあることから、介護実習の単位を認定する振替学修のプログラムや到達目標に対する達成度については早急に知見を集約する必要がある。そこで本稿では、A大学で実施した振替学修について報告するとともに、他の養成校が行った振替学修についても報告を促す契機になればと考えている。

本研究の目的は、ICTを活用した介護実習の振替学修の内容及び、その成果と課題を明らかにすることである。

II. 振替学修内容

A大学が実施した振替学修の概要は以下の通りである。

(1) 使用したICTツール

非対面授業及び様々な連絡と報告についてはCisco社のWebex Teamsを使用した。また、学修成果物の管理についてはGoogle Driveを使用した。

(2) 振替学修の構成

学修A（ウェブ講義）、学修B（課題学修）、学修C（対面式での生活支援技術の集中演習）、学修D（9ケースの事例検討）を組み合わせることで、必要な知識及び技能を修得することとした。

(3) 振替学修の時間数と単位数

介護実習Ⅲの時間数および単位数と同じ、135時間の学修で3単位とした。授業時間数（いわゆるコマ数）ではなく、介護実習と同様に実時間で算出した。すなわち、A大学では授業1コマが90分なので、1コマあたり1.5時間とした。

非対面での通常授業を行っている期間に振替学修を行うことから、対象学生全員が授業のない時間帯をあらかじめ抽出して、その時間に実施するように計画した。そのため、約3か月間のプログラムとなった。

(4) 学修内容と時間配分

1) 学修A（9時間）

ウェブ授業で9時間実施した。内容は、障害の原因となる疾患、動画を用いた障害者支援施設における支援の実際、障害者総合支援法、ケアマネジメント、障害当事者によるウェブ講義などで構成した。

2) 学修B（24時間）

事前に課題を示して各自で取り組むこととした。おもな内容は学修Aの予習と復習とした。

3) 学修C（12時間）

夏期休暇中に対面式で生活支援技術の集中演習を行った。1日あたり6時間のプログラムを2日連続で実施した。17名の学生を実技演習用に5つのグループに分けて、移動、移乗、食事、入浴、排泄について演

習を行った。

4) 学修D（90時間）

9つの事例を用いて介護過程の展開演習を実施した。当初予定していた実習配属に沿って、教員1名あたり学生2～4名となる6つのグループを編成した。1事例ごとに10時間で構成し、そのうち、担当教員を交えたグループごとのウェブ事例検討会を1.5時間行った。1事例ごとの学修時間配分を表1に示す。

表1 学修Dの事例ごとの学修内容と時間配分

学修内容	学修時間
疾患について	2時間
日常生活の把握	2時間
日常生活上の課題抽出	2時間
個別支援計画立案	2.5時間
担当教員を交えたグループごとのウェブ事例検討会	1.5時間
合 計	10時間

(5) 学修時間と学修内容の管理方法

学修時間管理チェックシートを作成し、対象となる学生全員に事前に郵送した。学生自身が学修した日時および学修内容を簡潔に記録した上で押印する方法で学修時間を管理した。

Ⅲ. 研究方法

(1) 調査対象

A大学の介護福祉士コースに所属する3年生17名である。この17名は全員、介護実習Ⅲの振替学修を行った学生である。

(2) 調査方法

振替学修が終了した後に、Google フォームを利用したインターネットによる無記名のアンケート調査を実施した。

Googleフォームでアンケートを作成する際に、「ログインが必要」の項目からチェックを外しておくことにより、回答者のメールアドレスが記録されない設定にした。調査対象の17名の学生全員に、Googleフォームの回答用URLを電子メールで配信し、回答者自身がそのURLに直接アクセスする方法で行った。

(3) 調査期間

2020年8月6日から8月31日までの約1か月間とした。

(4) 調査内容

1) 介護実習Ⅲの到達目標に対する達成度の自己認識

A大学が介護実習Ⅲの到達目標として設定している10項目に関して、学生自身が振替学修によってどの程度学べたと自己認識しているかを把握するために、項目ごとに設問した。10項目の到達目標のうち、表2で示した通り、1)、4)、5)、8)、10)の5項目は、振替学修の実態に合わせて、設問の際に一部内容を修正した。

回答方法は、1:しっかり学べた、2:まあまあ学べた、3:あまり学べなかった、4:全く学べなかった、のなかから1つ選択することとした。

2) 振替学修を通して学べたと思うこと

自由記述で回答を求めた。

表2 介護実習Ⅲの到達目標と修正した設問文

番号	介護実習Ⅲの到達目標	修正した設問文
1)	尊厳を持って接するとはどのようなことなのかを具体的に考察し、実践することで基本的な態度を養う	尊厳を持って接するとはどのようなことなのかを具体的に考察する
2)	介護を必要とする人に注目し、その人の考え方や生活習慣を知ろうとする	
3)	自立支援をめざした個別介護のあり方について学ぶ	
4)	個別支援計画の作成や個別支援会議への参加で、計画的介護の現状を知る	個別支援計画の作成やウェブ事例検討会への参加で、計画的介護の現状を知る
5)	本人と話し合い、本人の思いと施設の現状について学ぶ。	利用者の思いについて学ぶ
6)	計画をふまえて、かつ、柔軟に現状に応じた実践力を養う	
7)	介護を行う際、なぜそのようにするのかを説明することができる	
8)	よりよい介護の支援方針を考え、方針にそった介護を行うことができる	よりよい介護の支援方針を考えることができる
9)	福祉用具や生活環境をアセスメントし、その調整の方法を考えることができる	
10)	適切で内容がわかりやすい日誌を書くことができる	適切で内容がわかりやすい記録を書くことができる

3) 施設実習と比較して、振替学修では不十分だったと思うこと

自由記述で回答を求めた。

4) その他

今回の振替学修を通して思うことについて、自由記述で回答を求めた。

5) 分析方法

選択式の質問については単純集計を行った。自由記述の回答は、それぞれの設問ごとに以下の手順で分析した。まず、意味が分かる一文ごとに分割した。次に、その分割したデータを比較検討して、意味や内容の似たものごとに分類した（サブカテゴリー化）。さらに、サブカテゴリーを内容の類似性によって分類した（カテゴリー化）。

6) 倫理的配慮

回答用URLを配信した電子メールと、アンケートフォームの最初と最後に、研究への協力はあくまで自由意思であること、研究者は回答者を特定できないこと、回答の有無や回答内容は成績には一切影響しないこと、協力しない場合も一切の不利益がないこと、アンケートの回答をもってこれらに同意が得られたものと判断することを明記した。

なお、本研究は、東洋大学ライフデザイン学部研究等倫理委員会から承認を得たうえで実施した（承認番号L2020-002S）。

IV. 結果

振替学修を行ったA大学の介護福祉士コースに所属する3年生17名（男性5名、女性12名）全員から回答を得た。

表3 介護実習Ⅲの到達目標に対する達成度の自己認識

	介護実習Ⅲの到達目標	しっかり学べた 人数 (%)	まあまあ学べた 人数 (%)	あまり学べなかった 人数 (%)	全く学べなかった 人数 (%)
1)	尊厳を持って接するとはどのようなことなのかを具体的に考察する	5 (29.4)	12 (70.6)	0 (0)	0 (0)
2)	介護を必要とする人に注目し、その人の考え方や生活習慣を知ろうとする	14 (82.4)	3 (17.6)	0 (0)	0 (0)
3)	自立支援をめざした個別介護のあり方について学ぶ	12 (70.6)	5 (29.4)	0 (0)	0 (0)
4)	個別支援計画の作成やウェブ事例検討会への参加で、計画的介護の現状を知る	11 (64.7)	5 (29.4)	1 (5.9)	0 (0)
5)	利用者の思いについて学ぶ	5 (29.4)	8 (47.1)	3 (17.6)	1 (5.9)
6)	計画をふまえて、かつ、柔軟に現状に応じた実践力を養う	6 (35.3)	8 (47.1)	3 (17.6)	0 (0)
7)	介護を行う際、なぜそのようにするのかを説明することができる	5 (29.4)	9 (52.9)	3 (17.6)	0 (0)
8)	よりよい介護の支援方針を考えることができる	9 (52.9)	7 (41.2)	1 (5.9)	0 (0)
9)	福祉用具や生活環境をアセスメントし、その調整の方法を考えることができる	5 (29.4)	12 (70.6)	0 (0)	0 (0)
10)	適切で内容がわかりやすい記録を書くことができる	6 (35.3)	9 (52.9)	2 (11.8)	0 (0)

(1) 介護実習Ⅲの到達目標に対する達成度の自己認識 (表3)

1) 尊厳を持って接するとはどのようなことなのかを具体的に考察する

「しっかり学べた」が5名 (29.4%)、「まあまあ学べた」が12名 (70.6%) であった。

2) 介護を必要とする人に注目し、その人の考え方や生活習慣を知ろうとする

「しっかり学べた」が14名 (82.4%)、「まあまあ学べた」が3名 (17.6%) であった。全ての到達目標のうち、「しっかり学べた」と回答した学生の割合がもっとも高かったのが本項目であった。

3) 自立支援をめざした個別介護のあり方について学ぶ

「しっかり学べた」が12名 (70.6%)、「まあまあ学べた」が5名 (29.4%) であった。

4) 個別支援計画の作成やウェブ事例検討会への参加で、計画的介護の現状を知る

「しっかり学べた」が11名 (64.7%)、「まあまあ学べた」が5名 (29.4%)、「あまり学べなかった」が1名 (5.9%) であった。

5) 利用者の思いについて学ぶ

「しっかり学べた」が5名 (29.4%)、「まあまあ学べた」が8名 (47.1%)、「あまり学べなかった」が3名 (17.6%)、「全く学べなかった」が1名 (5.9%) であった。「全く学べなかった」という回答があった唯一の項目だった。

6) 計画をふまえて、かつ、柔軟に現状に応じた実践力を養う

「しっかり学べた」が6名 (35.3%)、「まあまあ学べた」が8名 (47.1%)、「あまり学べなかった」が3名 (17.6%)

であった。

7) 介護を行う際、なぜそのようにするのかを説明することができる

「しっかり学べた」が5名 (29.4%)、「まあまあ学べた」が9名 (52.9%)、「あまり学べなかった」が3名 (17.6%) であった。

8) よりよい介護の支援方針を考えることができる

「しっかり学べた」が9名 (52.9%)、「まあまあ学べた」が7名 (41.2%)、「あまり学べなかった」が1名 (5.9%) であった。

9) 福祉用具や生活環境をアセスメントし、その調整の方法を考えることができる

「しっかり学べた」が5名 (29.4%)、「まあまあ学べた」が12名 (70.6%) であった。

10) 適切で内容がわかりやすい記録を書くことができる

「しっかり学べた」が6名 (35.3%)、「まあまあ学べた」が9名 (52.9%)、「あまり学べなかった」が2名 (11.8%) であった。

(2) 振替学修を通して学べたと思うこと (表4)

35データ、9サブカテゴリー、3カテゴリーが生成された。以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは〈〉、データは「」と表記する。なお、表中のサブカテゴリー名の後に記載した数字は、そのサブカテゴリーに含まれるデータ数である。

1) 【対象者を深く理解する】

「9つの事例をもとにアセスメントや個別支援計画を考えることができ、より詳しく追求することができた

ように感じる」等のデータから〈幅広い事例の理解〉、「疾患についてなど詳細に調べる機会も少なかったので、今回は疾患の症状なども関連づけてアセスメントして個別支援計画でも取り入れることができたので充実したものになったと思う」等のデータから〈疾患の理解〉、「目の前にいないからこそ想像力を働かせて改善できる点を見つけたり、知識を深めることができた」等のデータから〈対象者を想像する能力〉、「基礎となる知識を学ぶことが出来たと思う」等のデータから〈基礎知識の理解〉が生成された。これらのサブカテゴリーから【対象者を深く理解する】のカテゴリーが生成された。

2) 【チームとして機能するために必要なこと】

「誰が見てもどのような人かわかる記録書くためには細かく記載することが必要なのだと気がつくことができた」等のデータから〈情報を共有できる記録の大切さ〉、「1つの事例を検討するにあたり、自分以外の人の意見を聞くことの重要性を改めて理解することが出来た」等のデータから〈他者の意見を聞く能力〉が生成された。〈生活支援技術の習得〉と〈自身の将来像〉はそれぞれ1つのデータであったが、他のデータとは類似しない内容だったため、それぞれサブカテゴリーとした。これらのサブカテゴリーから【チームとして機能するために必要なこと】のカテゴリーが生成された。

表4 振替学修を通して学べたと思うこと

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なデータ
対象者を深く理解する	幅広い事例の理解 (5)	9つの事例をもとにアセスメントや個別支援計画を考えることができ、より詳しく追求することができたように感じる
		様々なケースの事例をアセスメントすることができ、支援計画の幅が広がったと感じた
	疾患の理解 (5)	疾患についてなど詳細に調べる機会も少なかったので、今回は疾患の症状なども関連づけてアセスメントして個別支援計画でも取り入れることができたので充実したものになったと思う
		実際に実習を行っている時よりも、情報を見て考える時間が多かったため、特に疾病についての知識を得ることが出来たのではないと思う
	対象者を想像する能力 (5)	目の前にいないからこそ想像力を働かせて改善できる点を見つけたり、知識を深めることができた
チームとして機能するために必要なこと	情報を共有できる記録の大切さ (6)	直接利用者と関わることがなく、文字からの情報で、利用者の身体状況や思いについて考えたため、想像力が身についたと思う
		基礎となる知識を学ぶことが出来たと思う
	他者の意見を聞く能力 (4)	誰が見てもどのような人かわかる記録書くためには細かく記載することが必要なのだと気がつくことができた
		誰が読んでも分かるように、文章を工夫して記録を残すことの大切さを学んだ
	生活支援技術の習得 (1)	1つの事例を検討するにあたり、自分以外の人の意見を聞くことの重要性を改めて理解することが出来た
在宅生活者の理解	ウェブ講義での収穫 (6)	事例検討では同じ事例に対しても捉える視点によってそれぞれ違う個別支援計画が立てられていて、他のメンバーの意見を聞くことでより理解が深めることができた
		生活に関わる介護技術
		自分がどのような介護福祉士になりたいのか
在宅生活者の理解	ウェブ講義での収穫 (6)	ゲスト講演で自立生活をしている障害者の方のお話も聞くことができて、さまざまな視点でものごとを考えることができ有意義な振替学修になった施設ではなく地域で自立生活を行うために必要な支援について学ぶことができた

3) 【在宅生活者の理解】

「ゲスト講演で自立生活をしている障害者の方のお話も聞くことができ、さまざまな視点でものごとを考えることができ有意義な振替学修になった」等のデータから〈ウェブ講義での収穫〉が生成された。他のサブカテゴリーとは類似しない内容だったため、1つのサブカテゴリーであったが、その内容から【在宅生活者の理解】としてカテゴリー化した。

(3) 施設実習と比較して、振替学修では不十分だったと思うこと（表5）

24データ、6サブカテゴリー、2カテゴリーが生成された。

1) 【事例から状態を理解することの困難さ】

「文章で書いてある事例の情報が、具体的にどのような様子であるのかを理解することが難しかった」等のデータから〈文章では把握できない利用者像〉、「文面だけでは把握しきれない病状・身体機能が多かったた

め、正確なアセスメントにつながらなかった」等のデータから〈深掘りできないアセスメント〉、「行かなければわからないことのほうが多く、学んでいることが正しいのかわからない」等のデータから〈学修の不確かさ〉が生成された。これらのサブカテゴリーから【事例から状態を理解することの困難さ】のカテゴリーが生成された。

2) 【直接的な関わりの欠如】

「利用者と直接関わるができなかったために、その人の特性や障害の特性に合わせた関わり方を学ぶことができなかった」等のデータから〈実践的な生活支援の学修不足〉、「障害を持った方とのコミュニケーションの取り方を学べなかったと感じている」等のデータから〈コミュニケーション技術の学修不足〉、「施設の雰囲気や職員と利用者の関わり方等を知ることができなかった」等のデータから〈職員との関わりの欠如〉が生成された。これらのサブカテゴリーから【直接的な関わりの欠如】のカテゴリーが生成された。

表5 振替学修では不十分だったこと

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なデータ
事例から状態を理解することの困難さ	文章では把握できない利用者像 (6)	文章で書いてある事例の情報が、具体的にどのような様子であるのかを理解することが難しかった 事例を読んで、障害に対してなんとなくのイメージはつけることが出来たが、具体的なイメージをつけることが難しかったと感じた
	深掘りできないアセスメント (4)	文面だけでは把握しきれない病状・身体機能が多かったため、正確なアセスメントにつながらなかった こういった状態なのかを文面で想像するのは難しく、深いアセスメントができなかったように感じる
	学修の不確かさ (2)	行かなければわからないことのほうが多く、学んでいることが正しいのかわからない
直接的な関わりの欠如	実践的な生活支援の学修不足 (5)	利用者と直接関わるができなかったために、その人の特性や障害の特性に合わせた関わり方を学ぶができなかった 障害を持った方との関わりが持たずに終わってしまい、振替学習では補えなかったと感じている
	コミュニケーション技術の学修不足 (4)	障害を持った方とのコミュニケーションの取り方を学べなかったと感じている 障害の方たちとのコミュニケーションの取り方であったり、施設での様子を見ることができなかったことで得られなかったものは大きいと思う
	職員との関わりの欠如 (3)	施設の雰囲気や職員と利用者の関わり方等を知ることができなかった 障害者に対する支援方法や障害者施設における介護職員の動き方

(4) 振替学修を通して思うこと（表6）

32データ、9サブカテゴリー、2カテゴリーが生成された。

1) 【手応えと達成感】

「学ぶことも多く、実習と同じくらい充実した勉強ができていたと思う」等のデータから〈実習以上に学べたという思い〉、「アセスメントなどもいつも以上に詳しく深く追求して個別支援計画を立てることができた」等のデータから〈実習以上に丁寧にできたアセスメント〉、「今回の振替学修のように、多くの事例について考察して、事例検討会を行う機会はあまりないと思う。そのため、良い経験になったと感じた」等のデータから〈多くの事例検討で得られた経験〉、「学生全員が同じ事例を考えることはなかなか無いことなので、自分

のアセスメントと他者のアセスメントを比べてみることができるという点は良かったと感じている」等のデータから〈他者との比較からの気づき〉、「今回の学修を経験したことで、より深い現場での実習を行うことが出来る気がする」等のデータから〈次回の実習につながる学び〉、「グループや全体との連絡や報告の重要性、チームで動いていることを意識して連携して行っていく大切さを実感することができた」等のデータから〈グループ学修の良さ〉、「データとして残すため削除しない限り無くすことがなく、紙と違って管理しやすいと思った」等のデータから〈記録とデータ管理〉が生成された。これらのサブカテゴリーから【手応えと達成感】のカテゴリーが生成された。

2) 【無念さと負担感】

「障害者施設に行ったことがなかったので中止になっ

表6 振替学修を通して思うこと

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なデータ
手応えと達成感	実習以上に学べたという思い (7)	学ぶことも多く、実習と同じくらい充実した勉強ができていたと思う
		振替学習では施設実習と同じくらい、むしろ現場での実習以上のことを学ぶことが出来たのではないかと感じたい
	実習以上に丁寧にできたアセスメント (3)	アセスメントなどもいつも以上に詳しく深く追求して個別支援計画を立てることができた
		施設実習よりも介護計画に取り組めたのでよかった
	多くの事例検討で得られた経験 (2)	今回の振替学修のように、多くの事例について考察して、事例検討会を行う機会はあまりないと思う。そのため、良い経験になったと感じた
	他者との比較からの気づき(2)	学生全員が同じ事例を考えることはなかなか無いことなので、自分のアセスメントと他者のアセスメントを比べてみるという点は良かったと感じている
	次回の実習につながる学び(2)	今回の学修を経験したことで、より深い現場での実習を行うことが出来る気がする
	グループ学修の良さ (3)	グループや全体との連絡や報告の重要性、チームで動いていることを意識して連携して行っていく大切さを実感することができた
先生、友人、家族のサポートがあったからこそ成し遂げることが出来た		
記録とデータ管理 (2)	データとして残すため削除しない限り無くすことがなく、紙と違って管理しやすいと思った	
無念さと負担感	実習に行けなかった無念さ(7)	障害者施設に行ったことがなかったので中止になって残念でした 現場で学ぶ機会がなくなってしまうのは残念だと思います
	振替学修の負担感 (4)	毎日課題があり、提出も迫られているので、精神的にも、体力的にもきつかった
		実習はもちろん大変だが、実習に相当する時間分の学修を行わなければならないのはさらに大変だった

て残念でした」等のデータから〈実習に行けなかった無念さ〉、「毎日課題があり、提出も迫られているので、精神的にも、体力的にもきつかった」等のデータから〈振替学修の負担感〉が生成された。これらのサブカテゴリーから【無念さと負担感】のカテゴリーが生成された。

V. 考察

振替学修内容の適切性を検証するためには、振替学修によって、介護実習Ⅲの10項目の到達目標をどの程度達成できたのかを測定する必要がある。しかし、現実には達成度そのものを測定することはできない。また、仮に実習に行っていたとしても、全学生が全ての到達目標を達成できるものでもない。そこで本研究では、到達目標の項目ごとに学生自身が「どの程度学修できた」と自己認識しているかを測定し、その結果から振替学修内容の適切性を検討することとした。さらに、振替学修全体についてより具体的に明らかにするために、自由記述でも回答を求めた。これらの結果から今回実施した振替学修について考察を進める。

(1) 振替学修内容の適切性

介護実習Ⅲの10項目の到達目標に対する肯定的回答（しっかり学べた＋まあまあ学べた）の割合は、100%が4項目、90%台が2項目、80%台が3項目、70%台が1項目であり、全体的にみれば概ね適切だったと考える。なかでも半数以上の学生が「しっかり学べた」と回答した2）介護を必要とする人に注目し、その人の考え方や生活習慣を知ろうとする、3）自立支援をめざした個別介護のあり方について学ぶ、4）個別支援計画の作成やウェブ事例検討会への参加で、計画的介護の現状を知る、8）よりよい介護の支援方針を考えることができる、の4項目については、今回の振替学修でも十分に学ぶことができたと考えられる。今回、学修

Dとして1事例ごとに8.5時間の自己学修と、1.5時間の教員も交えたグループごとのウェブ事例検討会を実施した。これを9事例行ったが、ウェブ事例検討会では、対象者理解や自立支援、様々な支援方針について活発な意見交換がなされていたことから、このようなプログラムが良好な結果に結びついたのでないかと推察する。

一方、「しっかり学べた」という回答が30%未満だった項目が4項目あった。1）尊厳を持って接するとはどのようなことなのかを具体的に考察する、5）利用者の思いについて学ぶ、7）介護を行う際、なぜそのようにするのかを説明することができる、9）福祉用具や生活環境をアセスメントし、その調整の方法を考えることができる、の4項目である。「利用者の思い」や「介護を行う際」といった内容は文章の事例からは学修しにくかったものと思われる。しかしこれらについても前述の通り、「まあまあ学べた」を加えた肯定的回答は76.5%～100%であることから、大きな課題とまでは捉えていない。ただ、今後も振替学修を行う機会が生じた場合には、学修Aのウェブ講義や、学修Dのなかのウェブ事例検討会などの場面で、これらの内容について意識する必要があると思われる。

(2) 振替学修の成果

振替学修で学べたことについて得られた自由記述回答を分析した結果、【対象者を深く理解する】、【チームとして機能するために必要なこと】、【在宅生活者の理解】の3点が浮かび上がってきた。それらが最終的に【手応えと達成感】につながったと考える。これは振替学修における非常に望ましい側面と言えよう。

今回の振替学修を行うにあたり、まず筆者が考えたことは、いかに学生が主体的に取り組めるように支援するかという点であった。その理由は、学生自身が「実習の代わりにやらされている」という認識をもってしまふと、135時間にわたる自宅学修の継続が困難になる

と危惧したからである。そのためにいくつかの工夫をした。その一つがWebex Teamsというウェブシステムを使ったことである。Webex Teamsの詳細については紙幅の関係上割愛するが、その特長は、ウェブ講義が行えること、全員が登録しているチーム内でさらに複数のグループ分けができること、講義時間以外でも常時チャット機能を使用できること、アカウント管理が徹底しているためにセキュリティ機能が高いことなどである。今回、17名の学生を6つのグループに分けたが、そこでは、事前に筆者とグループリーダー間でチャット機能を用いて十分に意見交換を行い、学生の意見を可能な限り尊重した形で時間配分等を確定させた。さらに振替学修期間中、学生はチャット機能を使用して、学修開始時刻の合図や学修内容に関する質問など、多くの情報を発信していた。筆者は学生が発信する情報全てに反応することにより、学修支援を行った。【手応えと達成感】の背景には、計画された学修内容以外にも、チャット機能を用いて行った多くの情報交換や励まし合いなどの要因が含まれていたと推察する。長期間にわたる自宅での学修は、孤独感が学修の阻害要因になることが事前に予測されたために、このような方策を立てていた。今回はその方策が有効に機能したと考える。

（3）振替学修の課題

実践現場に行かなければ経験できない内容についてどのようにアプローチするかは、振替学修内容の計画段階から最大の課題であった。振替学修では不十分だったことについて得られた自由記述回答を分析した結果、【事例から状態を理解することの困難さ】と【直接的な関わりの欠如】という2つのカテゴリーが生成された。それらが【無念さと負担感】につながっていたと考えられる。

今回得られたこれらの課題への対応としては、ウェブ講義のプログラムに、実習指導者や施設利用者自身に

登場していただくようなものを考える必要があると思われる。今回の振替学修を計画した時期は、COVID-19の感染拡大による緊急事態宣言下だったこともあり、実習施設にそのような打診をすることができなかった。そこで、在宅生活を送っている重度障害者の協力を得て、同時双方向でのウェブ講義と意見交換会を実施した。これにより【在宅生活者の理解】として一定の成果を挙げることができたが、施設実習ならではの経験に近いものを得るためには、実習予定だった施設からのライブ講義なども検討する必要があると考える。

本研究では時間管理や課題提出に関する負担感も抽出された。この点についても事前に推測できていたために、紙媒体ではなくGoogle Driveを用いて全ての課題をクラウドで管理する方法で実施した。これにより筆者は全学生の提出書類をリアルタイムで確認でき、内容の不備や未提出に関して随時学生に連絡することができた。その結果、未提出課題が蓄積されるような状況は発生せず、全学生が計画通りのペースで課題を提出できた。振替学修は相当の学修量になることから、負担感を無くすことは困難だが、必要に応じて随時微修正できるようなシステムづくりや、チャット機能やウェブ講義等の場面で学生の声を傾聴し、精神的な負担感を軽減させるような支援が必要だと考える。

Ⅵ. 結論

本研究では、振替学修で一定の学修成果が得られたことを示すことができた。COVID-19の状況次第では、今後も介護実習を振替学修に変更せざるを得ない状況が続く可能性がある。本稿は1つの養成校からの報告であり、この結果をもって一般化できるものではないが、各養成校が実施した振替学修内容に関する知見を集約することで、より精度の高い振替学修プログラムの作成および実施が可能になると考える。本稿がそのきっかけになることを切に願う。

【引用文献】

- 1) 文部科学省・厚生労働省（2020）『新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和2年2月28日事務連絡）』
<https://www.mhlw.go.jp/content/000605026.pdf>
(2020.8.12)
- 2) 文部科学省・厚生労働省（2020）『新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和2年6月1日事務連絡）』
<https://www.mhlw.go.jp/content/000636112.pdf>
(2020.8.12)
- 3) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟（2020）『新型コロナウイルス感染症に伴う社会福祉士・精神保健福祉士養成の対応について（令和2年5月26日）』
http://jaswe.jp/novel_coronavirus/doc/20200526_corona_taiou.pdf
(2020.8.12)

